

総社市ひきこもり支援センター視察研修を終えて

美作大学社会福祉学科3年菅原研究室

〔ひきこもりサポーターの役割について〕半田瑞稀・中田帆波

総社市は、ひきこもり支援の先駆都市であり、ひきこもりサポーターの養成を積極的に行っている。今回総社に研修に行き、ひきこもりサポーターは、社協と連携し、居場所で本人や家族へサポートを行っていることが分かった。ひきこもりサポーターの登録者は現在77名で、当番制で居場所の運営を行っている。そして、サポーターへの支援として、定例会を行っており、情報共有を行う場が用意されている。また、社協とすぐに連絡をとれる体制がとられており、サポーターへの支援も充実している。サポーターを養成し、その後サポーターが活躍できる場が用意されていることやサポーターへの支援体制が整っていることが、総社市が引きこもり支援を強化する基盤となっている。

また、ひきこもり支援センターとともに、家族会も立ち上がり、居場所支援も行われている。家族会では何でも話せる関係性があることで、日頃あったよいことや、悩んでいること等小さいことでも報告し合うことができる。そして、家族会に参加する家族の中にもサポーターとして活躍している人がいる。ひきこもり本人の家族にとって、本人とのかかわり方や距離感が分からず最初は戸惑ってしまうと思う。しかし、ひきこもりサポーター養成講座で引きこもり支援について学ぶ中で本人との接し方について考えることができたという意見を聞くことができた。このことから、ひきこもりサポーターの養成は、ひきこもり支援を行う人材を増やすだけでなく、ひきこもりに悩む方々がひきこもり支援に関する正しい知識を習得する場として重要な役割を果たしていると推測される。また、ひきこもりサポーターは、ひきこもりが家族だけの問題ではなく社会全体の問題であることを理解し、それを周知、啓発する。このように、ひきこもりサポーターは、ひきこもりに関する偏見をなくすための役割を果たす大切な存在になっている。



〔家族会について〕平田桃香・小林真依

総社市ひきこもり家族会「ほっとタッチの会」はひきこもり当事者が家族にいる人たちを対象としている。ひきこもりについての知識・理解を深め、家族間で交流、ひきこもり家族の孤立を防止することやリフレッシュが目的である。

家族会には20代～50代程の子どもを持つ親など幅広い世代の人が参加している。幅広い世代の人が参加するため、将来についてだけでなく過去の振り返りもでき、話も広がりやすい。

家族会の参加者は「家族が変わらないと子どもも変わらないのでは」と考え、ひきこもりサポーター養成講座に参加してひきこもりサポーターになる家族もいる。ひきこもりについての理解や自分には何が出来るのかを見つける機会になっており、家族がひきこもりについて理解を深めることで、「少しずつひきこもり当事者も変わっている」と家族も実感していると会長は話されていた。

家族会では研修や茶話会だけでなく、「大人の遠足」という外出も行っており、楽しみのあるものになっている。遠足では普段の家族会では話しづらいことも話せる機会になっているようだ。

家族会の参加者が家族会につながるきっかけの一つとして社会福祉協議会の紹介があると社協職員から聞いた。そして家族会の参加者が総社市社協の良い点として、窓口やその対応について挙げていた。

参加者は悩み、困っていた時の相談の入り口である、窓口の雰囲気が高く、相談しやすかったと話されていた。

平成30年度に行われたKHJ全国ひきこもり家族連合会の調査によると継続的な支援が終了する理由として「来談者の意欲低下」という意見が多く挙がっている。このことから相談者を継続的に支援するためには、相談者が安心だと感じられる環境が次の支援につながるために必要だと分かる。

実際に社会福祉協議会職員は窓口や電話対応について「家族のように親身に対応すること」「電話や相談があった時、たとえ支援が出来ない場合でも断らない」ということを心掛けていると話されていた。このような心掛けは相談者が「話してよかった」と安心できる環境を作る理由となっているのではないかと考える。(トトロ通信NO.89-3へつづく)